

明治四十年五月三日發行

## 美術館の水彩畫

大下藤次郎

去る三月二十日から開場せられた東京勸業博覽會美術館には水彩畫が三十點近くある、第一回第二回の昔しは知らず、余が記憶してゐる第三第四回の博覽會には水彩畫は出品されてゐなかつたやうだ、第五回の大阪の博覽會にては、中林といふ京都の畫家の小さな一點の水彩畫を見た、今年は西洋畫全體の上から見ても約三分一は水彩畫である、敢て點數の多いばかりでなく技術も確かに大なる進歩してゐる、且從來は水彩畫を以て立たんとするもの、三宅丸山兩氏と余とを合せて僅かに三人のみであつたが、石川氏は既に水彩畫専門と見るべく、次では中川大橋兩氏の如き有力なる人々が油繪の筆を投じ、尙織田一麿氏も一意この方面を研究せらるるとの事である、水彩畫の前途極めて有望なりといふべし。

さて余自身は甚だ拙なきものを出して置ながら、他人の作品の批評など僭上の至りではあるが、『みづる』讀者に對する義務として、圖様の紹介を兼ね聊か思ふ所を陳べて見やう、そして未だ會期も永い事であるから、其中の三四の作については更に細評を試むる積りである。

## 七〇 花園 南薰造氏筆

花園の奥に一寸家の見える小さなスケッチである。スケッチとしても甚だ粗雑なものあつて、強て批難すべき處もないが、また佳い處も見出せない。

## 七一 森の道 三宅克己氏筆

森といふよりも寧ろ林の中の一筋道で、全體が夕暮の黄な調子で、左の上部に樹の葉を透してオレンヂ色の光りが見える。筆遣ひも常よりは舒びやかで、見た感じは甚だ佳い、強て難を言へば道路が右の方へ傾いて見えるのと、前景に同じやうな太さの樹木が三四本並んでゐて、それに遠近が見えぬとである、そして繪の中心、森の道の盡くる處あたりには何か目につくものが欲しいやうに思つた。繪はワットマン全紙の縦畫で可なり大きなものであるが、このやうな一部分の感じを描くのに、これだけ大きなものには及ばぬことであらう。

### 七二 船夫 五姓田芳柳氏筆

荷船が半分現はれて船夫が一人體を押し立てゐる小さな繪である。穩やかな海、華やかな日の光、その日の光を浴びて立てる船夫、色彩は貧しいが快怗で、弱い調子の繪としては中々手際よく出来てゐる。

### 七三 麥燒く夕 丸山晚霞氏筆

ワットマン全紙で、上州吾妻河畔の村落の夕暮を寫したものである。中央には白く光れる川あり、左右の崖上には農家三五、そこから所謂麥燒く煙りが盛んに起つてゐる、そして遠景は信濃あたりの高山が巔を見せてゐる、前景は初夏の茂れる緑で暮くなつてゐる。余は初め此繪を丸山氏の畫室で見た時には、モット空の色に紅を含んでゐて、如何にも初夏の夕暮の感が充分であつたが、光線のためか額縁の關係か判らぬが、この會場で見るとタイプ調子が異つてゐる。三宅氏の一局部の描寫と反對

に、これは幅は二三里と見えるといふ眼界の濶き場處を選んだもので、視る人に大きな感じを與へる。若し今一層煙を多くして遠山を淡くしたなら、猶更結構であらうと思はれた。

### 七四 朝の明治丸 渡邊錦吾氏筆

西洋形帆前船一艘、一本の帆綱も見落すまいといふ意氣込で描いてある小さな繪である。朝の趣も見えず、何等の面白味も感じない、寫真を見て描いたのではあるまいか。

### 七五 夕暮 森本茂雄氏筆

全體を點で描いてある所謂印象派の畫で、丘の上に杉五六本、それに強い夕日が輝いてゐて、杉の後ろに夕月が出てゐる。大きさはワットマン半分位ひ、強い感じはよく現はれてゐて手際も悪くはないが、月のある空の色が稍不自然であるまいか。

### 七六 月夜 中川八郎氏筆

半切の縦繪で、空には白い雲が層をなしてゐて、中央に暗い森があり、森の下に燃火のある二三軒の家がある。そして月は見えず、地に家の影を見せてゐる。月夜としてはよい見付方で、夜の靜かさも偲はれる、空は多少し明るい方がよいと思つた、下の家の描き方は甚だ不確で不親切である。

### 七七 たそがれ 細井未明氏筆

手際のないキレイな小さな繪で、夕暮の空、一叢の枯木林、靜かな水も見える。

### 七八 アルカザルの庭 吉田藤尾女史筆

洋風の規則立つた庭園、鉢植も少しくありといふ十六切位ひの

小さな繪である。行届いた描き方であるが、地面に在る影の色が少し紫ボク見える。

らう。

### 七九 ベニス 吉田藤尾女史筆

四ツ切位ひの縦畫で、可なり強い熱色が使つてあるが感じのよい繪である。筆にも力が見えてコセ／＼した處のないのは嬉しい。

### 八〇 夏日 河合新藏氏筆

前號で諸君の御馴染の繪で、大きさは半切である。竹その物の性質から來たのかも知れぬが、スツキリとして視た目は甚だ愉快である。竹藪の下の地の色が暗く、全體に色が貧しいといふ難もあるが、竹の繪としては成功したものであらう。

### 八一 風景 松原一風氏筆

桂木

景色畫に風景といふ畫題はあまり考がなさ過る。圖は雜司ヶ谷の楓らしく、小さな色の寒い繪である。描法も極古臭く、自然の見方も粗雜の様に思はれた。樹木の色と地面の色との調和も悪い、マネギの手拭の色にも厭味がある、たゞ細かく寫してあるといふ點だけ取り處であ



筆ド - オス - ビスム - ゼ

### 八二 滿洲の風景 石川欽一郎氏筆

小なる二枚の縦畫を一つの額縁へ入れてある。此會場に出品されたる多くの水彩畫の額縁は、畫家が相應の注意を拂つたのであらうが、よく繪と調和してゐるのが少ない。石川氏の繪は此點に於ても成功してゐる。圖は氏が滿洲滞在中の寫生で、場所の異つてゐるのみでなく、人物の活動もよく現はれて面白く見られた。氏は其作を示す毎に、色彩は豊富になり、調子も確りして來て、著しく進歩の見ゆるは感服の外はない。たゞ全體の色の上からコバルトが多過る様は思はれた、滿洲の色であると言はるればそれ迄であるがヤ、目障りであつた。

### 八三 樂器 織田一磨氏筆

ワットマン全紙の大作で、赤き華々しい色の樂器が中心となつて、左の上部へかけて白百合の花が夥しく置かれ、右の下部には能の面がある。寫生は忠實で、頗る苦心の作と見受たが、全體が何となく固く、殊に花

が紙細工の様に見えたのは筆者の一考を煩はしたい處である。

八四 滿洲の風景 石川欽一郎氏筆

八二と同評。これは三枚を一つの額縁に入れてある。

八五 古代の獵裝 五姓田芳柳氏筆

狩衣着けたる武士が立つてゐて、其左の方に馬が居る小さな繪である。構圖、描法、色彩、何れも感服出來ぬ繪で 先生の作としては失敗であらう。

八六 とりいぬ 中川八郎氏筆

半切の横畫で、拜島あたりの秋であらう、夕日は未だ屋後の紅葉せる梢に残つてゐるに、空には圓い月が出てゐる。稻を取入れてゐる農夫二三、秋の日の短かいのを啣ちつゝあらん。總體に色彩に富んでゐて愉快な繪である。秋の夕の感も充分に見えてゐる。圖柄の複雑した割合に統一もある。但慾を云へば限りはないが、我々のやうに多く自然に親しんでゐる者の眼から見ると、多少の缺點が見出されぬ事もない、繪に其感じさへ出れば何でもよいやうなものではあるが、感じを現はすと同時に自然といふとも忘れぬやうにありたい。此繪に於て一番目についたのは月である、月が球状をなして前の方に凸に見ゆるは如何のものにや、次は東の空の色が重過て秋の夕としては物足らぬ、家の後ろの森が家よりも前へ出て來てゐる様に見える、田の刈跡の緑の草が、恰も夏野のそれの如く長短不揃なのは自然ではない、此繪の佳作であるとは否まぬが、忠實に自然を研究した結果であるとは思はれなかつた。

八七 牡丹 大橋正堯氏筆

同じく半切の縦畫で、鎌倉某寺の庭を寫したものの、前に自牡丹があつて左の方に石燈籠、其後ろは木立になつてゐる。晩春の趣はよく現はれてゐたが、後ろの木立にモ一少し色を見せて貰いたかつた、木立の色があまり寒む過て繪が甚だ淋しい。

八八 夏の光 丸山晚霞氏筆

半切の横畫で、山中の崩れた崖に夏の日が照してゐて、下半分は暗い影になつてゐる、其黄に輝く崖の色と、前景の影の中の青味を含んだ岩の色との對照が如何にも佳い、かゝる場處を見た事のない人は余のやうに深く感じるか如何かは知らぬが、余は此作を場中第一に推すを憚らぬ。歸つて來てからも未だ其感には目に残つてゐる。若し余をして此處を寫させたなら、今一際崖の光を強くするのであるが、それでない方が却て自然であるかも知れぬ。

八九 ちやぼ 坂井紅兒氏筆

白いやぼが二羽描いてある小さな繪で、形は中々正しく寫されてゐる。筆遣ひも器用で色彩もよい、たゞ羽毛が少し固く活働が見えぬのは遺憾である。

九〇 江流

謙遜でも遠慮でもなく、甚だ御耻しい余の出品である。思ふやうに出來ぬため筆數ばかり多くなつて、ユセ／＼したウルサイ變なものになつて仕舞つた、そして更に描き直す暇もなく其儘出したのである。圖は大判ケント二ツ切の縦繪で猪苗代の疏水

を寫したものの、中央に靜かな流れがあり、後ろには緑の山があり、右の岸には茂れる柳五六本、其影は深く水に映じてゐる。堤の盡くる處に橋があつて、小舟二三、傍に白い水禽が二羽流れを亂してゐる。たゞこれ丈の繪で、夏の水邊の靜かな感じを描ふと思ふて失敗した作である。

**九一 花 織田一麿氏筆**

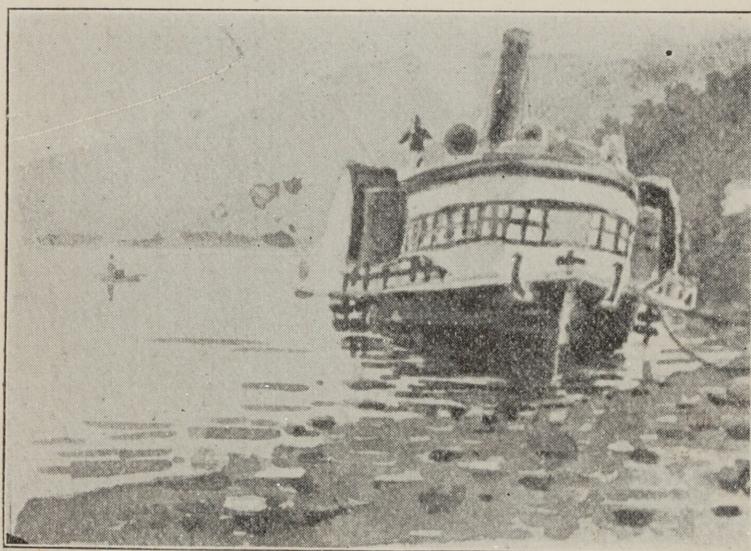
筆の達者な繪で、紅と白との牡丹の花三四輪極めて配置よく寫されてある。ドチラかといへば洒落た繪ではあるが、八三の樂器よりは此方がよく思はれた。

**九二 雲 三宅克己氏筆**

四ツ切位の繪で地平線を低くし、一列の黒い森が見えてゐる、雲は空一パイに描いて、處々に碧色を見せてゐる。雲も森も前景も同一筆法で、殊に前景の説明があまり粗末ではあるが、雲を寫した繪は他になく、其雲もよく感じが出てゐて、同氏の森の道よりは此方が好ましいやうだ。

**九四 朝霧 堀規矩太郎氏筆**

中央に圓い山があり、中腹に紅葉の林、前景に稻叢など置かれてある極淡白な四ツ切程の大きさの繪である。此作者は、霧とい



海 老 名 研 二 筆

ふものは繪具をうすくつけるものと誤解してゐるのではあるまいか、近來トント見かけぬやり方で、何だか十年も跡の展覽會に立戻つたやうな氣がした。

**九五 夕日 磯部忠一氏筆**

半切位ひの横繪で、並木に強い夕日が射してゐて、道の先の方には白馬を逐ふてゆく人物が一人、印象派のやり方である。點で描いたものとしては調子もよく、キラ／＼した夕陽の趣もよく現はれてゐた。

**九六 大崎の雪 古川新策氏筆**

鑑査官の氣紛れて出したものであらう、十六切位ひの縦畫である。

**九九 鶴ヶ岡 大橋正堯氏筆**

半切横繪で、冬枯したる杉の森、枯れたる草、前景僅かに水が見えて、濼い快い調子で出來てゐる。右の上から左の下へと極まつた筆遣ひが一寸眼につくが、此繪として格別難とするに足らぬ。強て言へば引締まつた處がないが、色に少しの

厭味のないのと、筆つきの素直であるのとは此作者の長所である。余は丸山氏の夏の光に次での作であると思つた、そして石川氏と同じく年々進歩の著しいのには感服せざるを得ぬ。以上は陳列せられたる水彩畫の總評である。美術館はいつも雜

沓してゐるので充分に觀察する事が出来なかつたため、極めて公平に評をした積りではあるが、多少の見落しや間違はあるかも知れぬ、且ある作品に對しては幾分か言ひ過した處もあつたかも知れぬ。その點は作者及讀者諸君の御宥恕を願ふ。

### 美術教育の缺乏

美術學校長正木直彦氏曰く、吾國は東洋の美術國など、自惚れる者があるけれど、其實上下を通じて今の一般の人士の趣味に乏しいことは甚しい、國民の中堅たるべき中流の人士が趣味に乏しいといふことは、實に國の品位に關することである。西洋諸國では、中等教育を受くる以上の人は必ず趣味を養ふべく文學及美術の教育を受けてゐるのである。佛國の如きは、如何なる方面の學問に志す人でも、中等以上の教育を受けた人は、必ず美術歴史教育を受けないものがない様な仕組になつてゐる。之に反して、吾國では普通教育を受くれば直ぐ専門の教育に這入るので、文學美術の教育を受くる機會は甚だ尠ない、即ち教育上からして趣味を養ひ得らるゝといふ機會は甚だ尠ないのである、教育せずして趣味饒き人格を求めらるは殆ど木に依て魚を索めるに等しきものである。(教育公報抜萃)

### 見物人換防法

戶外寫生に見物人の集まつて來るのはウルサイものだが、さてこれを防ぐよい方法もない。或人は見てゐる前で物を食ふとよ

いと云はれるがこれも際限のない話である、叱りつけなければ子供などは仇をする、砂でも撒かれたら堪らない、キタナらしい子供でも坊ちやんばよい子だからソツチへよつてをくれといふと素直に言ふとをきくが、ドケ／＼なんといふと中々意地張るものだ。ある西洋人は、人が來ると直ぐ繪に掩をして、其人の立去る迄濟まして煙草をのんでゐるといふ、それも暇潰してある。人が立つたらスケッチブックを出して其人の顔を寫生し始めれば、大概のアツカマシヤも逃げ出すであらうが、まだ實驗はして見ない、そしてこれは一人や二人には應用が出来るが、澤山集まられた時は駄目だ。はて何かよい工風はないかしらん。

○ 曾て萬朝の華山といふ人は、山水畫は人を厭世的にする、人物畫を獎勵しろといはれた、一理窟はあるが、併し火と鐵との人間社會に活動してゐる人達が、安息日に郊外の空氣を吸ふとが、多大の慰藉であるとを否定されぬ限りは、一幅の山水畫も、これ等の人達には好箇の清涼劑ではあるまいか。

○ 久しく病の床にある友からの手紙の端に『此頃いろ／＼な繪を枕頭の襖に貼りつけて眺めてゐるが、人物畫は見ておても、何故動かぬかとの欲が出て、物足らぬ心地はやがて厭氣に變るが、山水畫は自分もその畫中に遊んでゐる様で、いつ迄見てゐても飽きぬ』と書いてあつた。